

月例研究会（2020年5月27日）

近年のアジアから日本への 若者移民とその課題

——ネパールのケースから

渋谷 淳一

本報告は日本の外国人人口のうち大きな割合を占めるようになった東南アジア・南アジアからの若者移民について論じたものである。日本社会の彼ら／彼女らに対するイメージは開発途上国からの出稼ぎというものが強く、その移民動機の分析においても、東日本大震災や経済発展による東（北東）アジアからの移民の減少を補完するものというようなマクロ構造に注目するものが多い。しかし、彼ら／彼女らの出身国は新興国として経済成長の中にあり、日本以外への移民ルートも確立されている。よって、なぜ多くの国々の若者が日本を目指すのかという、彼ら／彼女ら自身や送り出し国の社会を対象とした検討が必要である。

この新しいアジアからの若者移民は私費留学生あるいは技能実習生として来日する。これは1980年代にはじまる中国からの若者移民と同様である。しかし、その割合は国ごとに異なり、どちらも多いベトナム、ミャンマー、モンゴル、留学生に集中するネパール、スリランカ、バングラデシュ、技能実習生がほとんどであるインドネシア、カンボジアと傾向が異なる。

両者は在留資格の建前とは異なり、非熟練労働を担っており、日本の外国人労働力の4割を超えるまでに成長している。一方で、彼ら／彼女らの受け入れには問題が多く、来日までに生じる莫大な費用や借金、定住化の難しさ、悪質な送り出し機関や受け入れ組織など、1980年代から生じている問題が是正されていない。

なぜ多くの若者が日本を目指すのか。調査を進めると、出稼ぎに単純化できない様々な理由があった。ここではネパール留学生のケースについて日本や現地でのインタビュー調査を踏まえ検討する。

ネパールは後発開発途上国に位置付けられるが、マレーシアや中東への出稼ぎや先進国に定住した親族からの送金により経済が底上げされている。こうした送金が子どもの教育投資に向かい、英語を習得するなど高等学校までの教育水準は高い。一方、ホワイトカラーなど、こうした人材に見合う雇用が創出されていない。また、限られた安定し高収入の就職口はコネクションが不可欠であり、多くの学生にはアクセスできない。よって、彼ら／彼女らは高卒時点、あるいは大学等に在学しながら海外への移住の機会を探ることが一般化している。

そうした中で日本が選ばれる理由となっているのは、家族・近隣縁者からの勧めである。日本に対する関心、キャリア形成、出稼ぎなどは2次的なものであった。高卒試験の成績を問われるオーストラリア留学が可能な学生も、家族の勧めにより日本を選択している。彼ら／彼女らにとって海外への移民は、高額な費用がかかるものの珍しいことではなく、家族により半ば用意された選択肢であるとも言える。

近年の留学生に対して「出稼ぎ留学生」「偽装留学生」という表現が用いられるが、それとは異なる文脈で、ネパールからの若者にとっても留学生としての日本語習得や進学、キャリア形成への意欲などは前提とならない。このことは日本語の習熟度が極端に重視される日本での進学、就職とはミスマッチを生じさせている。

以上のようなネパールからの若者移民の経緯が浮かび上がった。ベトナム、ミャンマー、スリランカのケースについてもまとめていきたい。（しぶや・じゅんいち 法政大学大原社会問題研究所客員研究員）